

## 令和 6 年度 県立内原特別支援学校 自己評価表

No. 1

目指す学校像	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆安全安心な環境のもと、子どもを主語にして学びあえる学校</li> <li>◆みんなが子どもの可能性を信じ、学び続ける学校</li> <li>◆保護者・地域の人に開かれ、みんなでつくる学校</li> <li>◆子ども・保護者・地域の人・教職員みんなが well-being になる学校</li> </ul>		
昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況
<p>【成果】</p> <p>○生活・理科・社会の次年度導入に向けて検討できたこと。</p> <p>○研究授業を通じた若手の授業力向上</p> <p>○会議の精選及び効率化</p> <p>○センター的機能の発揮</p> <p>○医療との連携強化</p> <p>○関係機関との支援会議の開催</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●グランドデザインにおける目的・目標の共有</li> <li>●個別の指導計画の作成～評価</li> <li>●単元をとおしての3観点での授業改善</li> <li>●対話を大切にした学校づくり</li> <li>●主体性を引き出す選択肢の一つとしての ICT 活用</li> <li>●みんなが当事者意識をもった学校づくり</li> </ul>	<p>1 安全安心な教育環境の整備と心身共に健康な児童生徒の育成</p>	<p>① 教育環境を整備し、人権意識を高め、安心して学べる学校づくりを目指す。</p> <p>② いじめ・不登校・虐待等への予防的取組と組織的対応の充実を図る。</p> <p>③ 児童生徒が主体的に取り組む健康教育と防災教育の推進を図る。</p> <p>④ 特性に応じた摂食指導、食物アレルギー等の適切な対応を図る。</p> <p>⑤ ヒヤリハット事例の検証と未然防止を徹底する。</p> <p>⑥ 様々な災害を想定した危機管理体制の強化を図る。</p>	B
	<p>2 これからを生きる子どもに合った学びの充実</p>	<p>① 「気づき」や「疑問」を大切にした「やってみたい」「できた」「わかった」「もっとやりたい」を実感できる授業を実践する。</p> <p>② 的確なアセスメントの実施と活用を図る。</p> <p>③ 学習指導要領の目標・内容に基づいた学習の充実を図る。</p> <p>④ 専門家と連携し、自立活動の視点を踏まえて授業を展開する。</p> <p>⑤ 選択肢を増やすため、ICT機器の有効活用を推進する。</p>	B
	<p>3 共につくる学校・地域社会（CS準備）</p>	<p>① 学部の系統性を踏まえたキャリア教育の工夫・改善を図る。</p> <p>② 高等部卒業後の進路の選択肢を広げる各部段階における体験的な学習の充実と実践を図る。</p> <p>③ 地域資源を活用した体験活動の充実を図る。（地域が教室） （校外歩行、仕事しらべ、職業見学、職場体験、地域貢献など）</p> <p>④ 地域交流・学校間交流・居住地校交流等の共同学習を推進する。</p> <p>⑤ 教育・福祉・医療関係機関との協働的な専門性の深化</p> <p>⑥ 教育活動を積極的に発信する。</p> <p>⑦ 水戸飯富特別支援学校との様々な交流を通し、連携・協働を図る。</p>	B
	<p>4 Well-Being をめざして</p>	<p>① 当事者意識をもった服務規律の遵守とコンプライアンス意識の醸成を図る。</p> <p>② 幸せに働ける心理的安全性のある風通しの良い職場の醸成と、適切なワーク・ライフ・バランスに向けた働き方改革を推進する。</p> <p>③ 主体的な行動を促し、認め、挑戦する人を応援する支援。失敗したら「やり直し」ができる環境づくり。</p>	B

評価項目	具体的目標	具体的方策	重点目標との関連	評価	成果(○)、課題(●)及び次年度(学期)への改善策(◇)
学校経営 管理 教育計画	○最上位の目的(誰一人取り残さない教育)・目標を了解した、安心・安全な環境づくり	○児童生徒及び教職員、環境面の状況の把握と情報共有。 ○グランドデザインに基づいた、対話による教職員のアイデアを活かした立案。	1-①② ③④⑤⑥ 2-①② 4-③	B	○校内でのグランドデザインの共有と課題を対話で解決する良さの実感 ●全ての児童生徒が主体的に学べる環境の実現 ◇児童生徒の教育的ニーズによる柔軟な学びの提供
教職員の 育成及び 指導・監督	○学習支援等、学び続けるイメージの共有と意識の涵養	○うちとく授業スタイルを実施すること等を通して、目的を了解し、職員全員が当事者意識をもち子どもたちが育つ環境・手立てについて対話を実践。 ○企画会、教務会、学年主任会、学年会、運営委員会、係間連携等活用等、縦横のつながりを意識。	1-①③ 2-①② ③④⑤ 3-③ 4-①	B	○校内研修の中で、子どもたちが育つ環境・手立てについて話し合ったことが授業改善につながった。 ●主体的で対話的な業務遂行の文化(学びの相似形)の醸成 ◇目的の共有と校務分掌組織・各会議等の役割の明確化と適正な分担、協働の推進
対外活動	○保護者や地域の方とみんなで学校づくりをするイメージの共有と当事者意識の涵養	○学校運営協議会準備にて学校をつくることについて熟議し、人材・地域資源活用。 ○ホームページ等で学校の取り組みをアウトプット。行事の他、普段の授業や教職員の校務分掌業務での取り組みを可能な限り保護者や地域の方々に発信する。	1-① 2-① 3-①② ③④⑤⑥ ⑦	B	○交流及び共同学習、地域の方の協力による授業づくり、PTA活動の充実等による「つながり」 ●学校運営協議会導入の意義や目的の共通理解と社会に開かれた教育課程づくり ◇学校運営協議会と連動した組織づくりと意識づくり、PTAとの協働

<p>コンプライアンス確保</p>	<p>○心理的安全性があり、お互い気づいたことを言葉に出せる環境づくり</p>	<p>○笑顔で誰もがありのままに対等に話せる雰囲気を普段より自分から心がける。 ○コンプライアンス研修にて人は悪事をしてしまう存在であることを振り返る。</p>	<p>1-①② ⑤ 4-①② ③</p>	<p>B</p>	<p>○「対話」や「心理的安全性」「主体性」の大切さへの気づき ●考えが対立した場合の対話の難しさ、子どもをみんなでみていく「開く」意識の醸成 ◇心理的安全性や対話のスキルについての研修</p>
<p>働き方改革</p>	<p>○教職員一人一人がワーク・ライフ・バランスを意識し、タイムマネジメントをしながら生き生きと働ける環境づくり</p>	<p>○衛生委員会主体で職員からの提案に傾聴し、やめられるもの・できるものはすぐに検討・改善する。 ○目的を合意した上で定時以降に退勤になる場合の予定退勤時刻の報告をしてもらう。</p>	<p>1-① 4-②③</p>	<p>B</p>	<p>○みんなで断捨離対話を実施したことで、当事者意識を高め職場環境の改善を図ることができた。 ●まだ多忙感を抱いている教職員が多いため、引き続きの改善見直し。 ◇目的を共通理解した対話による業務削減、力の入れどころの確認</p>
<p>ICT活用</p>	<p>○主体的に学ぶためのICT活用（個別最適化：選択肢を増やす）を推進する。</p>	<p>○児童生徒一人一人の状況を把握し、効果的活用事例を校内外に発信。 ○教務・研究研修・学習指導部の連携で進めていく。</p>	<p>1-① 2-①⑤ 3-⑥ 4-③</p>	<p>B</p>	<p>○情報教育係を中心に主体的な研修が行われ、タブレット等ICTの活用促進が見られた。 ●授業によって活用頻度に差がある。好事例発信不足。主体的な学びに向けての活用 ◇気軽に相談できる窓口設置等体制づくり、各係が協働した校内研修の充実と発信促進</p>

※評価基準： A：十分達成できている B：達成できている C：概ね達成できている D：不十分である E：できていない